

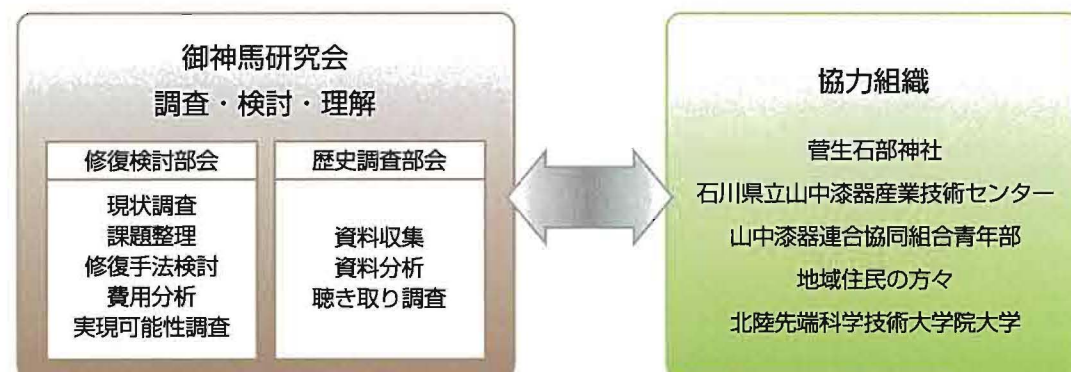
Title	蘇れ、御神馬！ - 菅生石部神社・御神馬プロジェクト -
Author(s)	
Citation	JAIST社会イノベーション・シリーズ, 12
Issue Date	2008-03
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/4864
Rights	
Description	

3 今後の展望

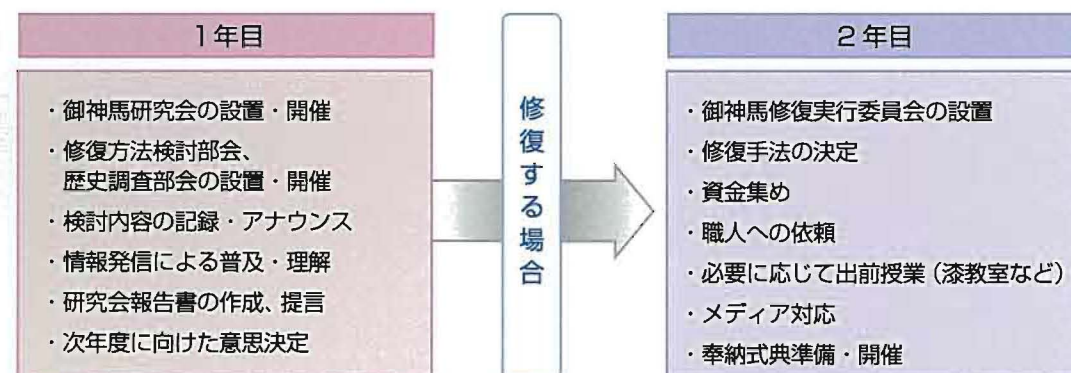
この御神馬の問題に関心を持つ関係者が集まって協議し、菅生石部神社・御神馬プロジェクトを推進します。具体的な推進体制として、本プロジェクト内に御神馬研究会と、必要に応じて修復方法検討部会と歴史調査部会を設置し、検討を進めます。北陸先端大は専門的見地からプロジェクト活動を支援します。

原則月1度の部会開催を通じて、検討課題を抽出、検討作業の優先順位を決定し、必要であれば短期的にワーキング・グループを設置します。1年後には次の段階への意思決定ができるように、修復メニュー、歴史調査の結果を報告します。

組織の構成



スケジュール(予定)



「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」とは？

「21世紀 COE プログラム」とは、日本に世界最高水準の研究教育拠点 (center of excellence) を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材の育成を図るため、平成14年度から文部科学省が実施している事業。「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」は、本学で採択された最初の COE プログラムであり、平成15年度から始めて今年が5年目、すなわち最終年度にあたる。本プログラムでは先端科学技術の研究の場、さらに社会のあらゆる状況において、イノベーションを起こすための知識創造プロセスの研究、そして、それを担う人材としての「知のコーディネーター」「知のクリエイター」育成に取り組んでいる。文理融合を、マテリアルサイエンス研究科(理系)と知識科学研究科(文系)の連携プロジェクトという形で実践している点が、本 COE の大きな特色である。

21世紀
COEプログラム

JAIST 社会イノベーション・シリーズ No.12

発行 2008年3月

発行所 国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学・科学技術開発戦略センター
〒923-1292 石川県能美市旭台1-1 知識科学研究科棟Ⅱ7階

■本誌に関するご意見、お問い合わせ

TEL: 0761-51-1839 FAX: 0761-51-1767 E-mail: coe-sec@jaist.ac.jp

本誌は、文部科学省21世紀 COE プログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」の助成を得て発行しております。

JAIST SOCIAL INNOVATION SERIES

社会イノベーション・シリーズ 12

蘇れ、御神馬！

— 菅生石部神社・御神馬プロジェクト —



加賀の菅生石部神社にある一頭の馬の像。この漆黒の御神馬(ごしんめ)は江戸時代に奉納されたといわれるものの、詳細は不明。長い年月を経て、ところどころ傷みが目立つけれど、文化財としてどう取り扱ったらよいものか。そこで、神社に地域のひとびとが集まり、御神馬の問題を考え始めました。初めから修復ありきでなく、修復すべきかどうか意思決定をするために地域に眠った情報を振り起こします。さあ、御神馬プロジェクトの発進です！

No. 12

G O S H I N M E P R O J E C T +

1 漆塗りの馬

2 月に行われる竹割まつりで有名な加賀の菅生石部神社。ここに漆塗りの一頭の馬の像があります。江戸時代、江沼地方に居を構えた彫刻家で塗り師、理右エ門が奉納したと伝えられている御神馬（ごしんめ）です。耳は漆皮（しっぴ）、各所に手の込んだ仕事がなされているようです。

しかし、長い年月を経て、その奉納馬も傷みが進み、昭和 50 年にいちど漆の塗り直しがなされたものの、あとは特別な養生をされる機会もなく現在も神社の拝殿に安置されています。

由緒が定かでない漆塗りの馬。この御神馬の再生について、神社を中心に地域のひとびとが集まって議論し、合意形成をしていくことがこのプロジェクトの主眼です。



写真：奉納された漆塗りの馬

果たして、この御神馬を修復することは可能なのでしょうか？

修復方法にはどのようなものがあるのでしょうか？

修復のための調査はどのような手順で行うべきでしょうか？

修復の費用はどのくらいかかるのでしょうか？

そもそも、この御神馬はいったいどこからやってきたのでしょうか？

作者の理右エ門とは？

文化財としての価値はどのように調査すればよいのでしょうか？

そして、神社、氏子の皆さん、地域にとって、この馬にはどのような価値があるのでしょうか？

すぐには答えを出せない問題ばかり。そこで、菅生石部神社の山下祐四郎宮司、権禰宜を務める野根茂治さん、漆器の産地・山中からは“山中漆器の母”と親しまれる石川県立山中漆器産業技術センターの向平節さん、山中漆器連合協同組合青年部の前田壮一郎さんが中心となって「御神馬プロジェクト」を立ち上げ、北陸先端大が研究会の運営を支援します。

このプロジェクト研究会では修復方法の検討や歴史調査を行い、一年後には修復の考え方、修復方法のメニュー、歴史調査の結果など今後の意思決定に必要な情報を整理し、関係者の皆さんに報告する予定です。このプロジェクトは修復作業を実施することが目的ではありません。その意思決定をするために情報を整理し、共有することが目的です。

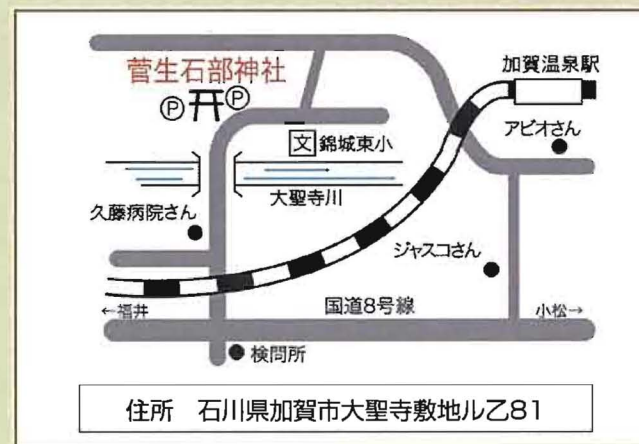
2 菅生石部神社とは

「御神馬プロジェクト」の舞台となる菅生石部神社についてご紹介しましょう。

菅生石部神社は加賀地方の古社で、むかし疫病が流行しそれを鎮めるために用明天皇元年（585 年）に宮中で祀っていた神々（現菅生石部神）をこの地にお遷しになり、疫病を鎮め五穀の豊穡を祈願したことに始まりました。

中世には越前國三ノ宮、後に加賀國二ノ宮となり、京都の北野天満宮領として天神信仰が盛んで、明治期には國幣小社に列せられました。往古より正親町天皇の頃まで一年二度の居入祭（おりいさい）には勅使が参向し、御衣神宝を奉まつるなど朝廷の崇敬篤く、木曾義仲・富樫昌家・足利義持・豊臣秀吉・山口玄蕃等の武門武将に深く尊崇されました。

前田藩においては氏神として神地寄進社殿造営調度の修復等が絶えず、夏祭天神講を藩祭とし、三日間の中の日を仕事休めの日として、藩内に住む人々全てを参拝させ崇敬の誠を捧げました。



写真：現在の菅生石部神社

創 祀	用明天皇元年（西暦 585 年）
御 祭 神	菅生石部神（日子穗穗出見命・豊玉毘賣命・鵜草草葺不合命）
境内末社	春日社（天兒屋根命・徑津主命・武甕槌神・姫大神） 八幡社（応神天皇） 白山社（菊理姫命） 稻荷社（宇迦御魂命） 事比羅社（大物主命） 菅原社（菅原道真公） 藤森社（大國主命）
ご 利 益	病気平癒・身体健康・安産・学業成就・武運守護
主な宝物	旧国宝 重要文化財 正親町天皇御震翰紙本墨書御詠草一幅 蒔絵角赤梨地手箱目録附 一合

